

仲間と走る

弘前市立南中学校

八木橋

颯

ぼくは、散々迷った挙げ句、入部を決めた。しめきりのぎりぎりまで迷って、しめきり日当日に入部届を出した。入部したのは陸上部。榊井や設楽と同じ陸上部だ。

自分が陸上部だから、という理由が大きかったかもしれないが、とにかくぼくは、市野中学校の駅伝メンバーに自分を重ねた。一区は設楽。二区は大田。三区はジロー。四区は渡部。五区は俊介。そして六区は榊井。どのメンバーも自分と似ているところなどなかったはずなのに、気が付けば自分を重ねて、一緒に走っている気分になった。

一区。何となくはつきりしないところは自分に似ているのかもしれない、と思いつながら、ぼくは設楽を見ていた。小学校の卒業が見えてきたあたりから、ぼくは友達とよく部活動の話をした。何部に入部するのかすでに決めている友達もいれば、ぼくみたいにまったく決まっていらない友達もいた。陸上部に入りたいとぼんやり思っただけなのに、吹奏楽部にも興味があったし、一緒に入部するメンバーも気になっていた。

た。小学校から野球を続けていたぼくの友達みたいに、強い思いがあったわけではなかったから、ぼくは設楽の気持ちがよく分かった。追い込まれないと気持ちにエンジンがかからないところも、どこか自分に似ているな、と考えながら、ぼくはたすきを大田に渡した。

二区。ぼくとは全然違うな、とはじめは大田を遠くに感じていた。でも、本気を出して負けるのが嫌で、はじめからチャレンジもしないであきらめてしまうところはぼくの中にもあって、なかなか本気で駅伝に向き合えない大田の気持ちも痛いほど分かった。負ける理由がほしくなる気持ちも、だれかのせいにして本気で向き合えない気持ちも、本当によく分かった。三区のジローにたすきを渡すころには、大田に親近感を覚えるようになっていた。

三区。ジローほどいいやつはいないとぼくは思う。だれかがやらなければいけないけれど、だれも引き受けないようなことを、ジローはいつでも引き受ける。ぼくに、そんな行動

力はない。やりたくないことは、できればやりたくない。避けられるものなら、避けて通りたい。「頼まれたら断るな」というジローのお母さんの言葉がぼくに刺さる。ぼくはジローを尊敬する。だからこそぼくは、ジローを心から応援した本を握る手に思わず力が入ったほどに。

四区。吹奏楽部の渡部だ。吹奏楽部、というところに、ぼくは引っかけかきを感じた。ぼくが入部を迷った吹奏楽部。陸上部に入部したことに後悔はしていないけれど、それでも何となく吹奏楽部に所属している渡部が心に引っかけた。サックスなんか吹きながら、榊井たちの誘いを、嫌みたっぷりな言葉であつさり断る渡部のことは、少し嫌いだつた。それでも、祖母と二人で暮らしていることや、友達をさりげなく助けるといった行動に触れ、いつの間にかぼくは渡部を受け入れていた。それどころか、渡部ならきつとやつてくれる、という信頼さえ芽生えていた。

五区。当日になつて走順が入れ替わつて、俊介が走る事になつた。ぼくは、記録会で当日になつて突然リレーを走ることになつた自分を重ねた。走順が変わることの重大さは、走る人にしか分からない。どれだけ不安だつたらう。でも、ぼくがレーンに立つたときと同じように、きつと俊介もスタートラインに立つた瞬間に、不安など吹き飛んで、ただただ走ることに集中したに違いない。俊介はまだ二年生だか

ら、きつと来年の駅伝は、アンカーを務めるはずだ。ぼくは、俊介をこれからも応援する。

六区。調子の上がらないキャプテン。駅伝に人一倍の思いをもつてメンバーを集めたキャプテン。ぼくの想像を超える辛さがあつたに違いない。でも、榊井は走る。言い訳なんかせずに、ひたすら走る。五人がつかないだたすきを受けて、ゴールを目指す。ぼくは、榊井のようになれるだろうか。自分の気持ちをコントロールすることの難しさは、中学生になつて嫌というほど感じている。それを榊井は、ぼくの目の前で見事にやつてのけた。県大会出場というみんなの思いを背負つて。人のせいにせず、病気のせいにせず、結果を残したことに、ぼくの心はふるえた。

ぼくは、六人のメンバーに、陸上への向き合い方について課題を突きつけられた気がした。以前の榊井のように、ぼくは陸上をチームスポーツと思つていないところがあつた。でも、今は違う。陸上もまたチームスポーツだ。種目は何であれ、仲間がいる。部員一人一人に思いがある。仲間の思いがチーム力になるのだと、ぼくは市野中学校の駅伝メンバーに教わつた。

今のぼくは、陸上部に入部したことに一点の後悔もない。ぼくは、これからもひたむきにゴールを目指して走る。仲間と、一緒に。